

2008年 第1回 インドスタディーツアー報告書



CONC'RN のスタッフの方々と

宮崎公立大学

| | | |
|---------|-------|-------|
| 加賀谷 まどか | 前住 深雪 | 上村 望弥 |
| 本木下 久美子 | 藤田 夏未 | 佐藤 香菜 |

目次

| | |
|------------------------|-------------|
| 1. インドスタディーツアーのはじまり | ・ ・ ・ ・ P3 |
| 2. 日程 | ・ ・ ・ ・ P4 |
| 3. 訪問先 | ・ ・ ・ ・ P8 |
| (1) CONC'RN | ・ ・ ・ ・ P8 |
| (2) Dr. Graham's Homes | ・ ・ ・ ・ P14 |
| (3) コルカタ日本総領事館 | ・ ・ ・ ・ P24 |
| (4) JICA スタッフによる講義 | ・ ・ ・ ・ P28 |
| (5) マザー・テレサの家 | ・ ・ ・ ・ P34 |
| 4. ツアーの企画から実行・報告会までの流れ | ・ ・ ・ ・ P36 |
| 5. 費用 | ・ ・ ・ ・ P38 |
| 6. メンバーの感想 | ・ ・ ・ ・ P40 |
| 7. お礼 | ・ ・ ・ ・ P47 |

第一回インドスタディーツアーのはじまり

“国際協力”というと、私達の日常生活とはかけ離れたものというイメージが強いと思います。日本という先進国で何不自由なく便利な生活をしている私達は、知らず知らずの間にこの恵まれた生活があたりまえになってしまっています。そしてそのように恵まれた環境を振り返ることよりも、目の前の日々の生活の慌ただしさに流されて、その中で生まれる不満や不安の方が、自分にとってはよほど大きい問題のように思われたりします。しかしだからといって、世界で起きている様々な問題に対して私達が全く関係のない存在で、何の責任もないということはありません。私達の生活よりもずっと困難な状況の中に生きて、あるいは生きてゆくのもままならない人達があります。最近では、そのような困難な状況の中で生きる世界中の人々の情報というのは、テレビなどを通してよく目にすることができます。そして何かしたいと多くの人達が思い、今では“国際協力”に全く興味はない、という人はあまりいないと思います。“国際協力”に興味はあるけれど、何をしたらいいのか分からない。そのように思う人はたくさんいて、宮崎公立大学の学生にもそのように感じている学生はたくさんいるのではないかと、学生生活をしていく上で感じていました。

知識や技術を何も持っていない私達市民が国際協力の入り口として、関わっていきやすい存在に、NGOがあるとします。宮崎にも、国際協力ネットワークを結んでいる、国際協力の分野で活動する4つのNGOがあります。宮崎では東京などの都市に比べるとこのようなNGOの数はとても少なく、国際協力に興味があってもこれらのNGOを知らない宮崎の学生も多いようです。NGOの仕事は専門的な部分が多いですが、学生ができるボランティアというのはたくさんあると思っています。

以上のような背景から、宮崎の、国際協力に興味のある学生を、国際協力の分野で活動する宮崎のNGOとうまく繋がるようなきっかけをつくりたいと考えていました。そのきっかけとして、このスタディーツアーを開催することとなりました。宮崎国際協力ネットワークの一つ、宮崎国際ボランティアセンターの理事、杉本サクヨさんのご協力をいただくこととなり、宮崎国際ボランティアセンターが運営に携わるインドのドクター・グラハムズホームズをはじめとする現地の活動を訪問させていただくこととなりました。国際協力に興味はあるけれど、何をしたらいいのか分からない、あるいは現地で実際に現場を見てみたいけれど、どうやって行ったらいいのか分からない、と思う宮崎の学生が、実際に自分たちが暮らす宮崎で活動しているNGOの支援するプロジェクトを、現地に行ってみることで、現実の問題を自分の目で見て、考え、国際協力の現場を垣間見ることで様々なことを学ぶ機会にしたいと考えました。そして宮崎に帰ってきてから、自分たちの見た現状や、宮崎のNGO、宮崎国際ボランティアセンターの活動を宮崎の学生に伝えていくことで、彼らがお互いに繋がるきっかけとなることを目的とし、この第一回インドスタディーツアーが開催されることとなりました。また学生が計画することで、費用の削減や、主体性のあるツアーになることを目指し、引率者のない、学生のためのツアーとなりました。

日程

8月31日(日)

福岡のホテルに宿泊

9月1日(月)

- 10:15 福岡空港発
- 15:50 チャンギ国際空港着(シンガポール)
- 21:05 チャンギ国際空港発
- 22:35 コルカタ空港着
- 23:00 移動<タクシー>
- 24:00 宿泊施設着

9月2日(火)

- 7:00 朝食 ミーティング
- 8:00 コルカタ空港へ<タクシー>
- 11:10 コルカタ空港発(国内線)
- 12:40 バグドグラ空港着
空港でCONC' RNの子どもたちの歓迎を受ける
- 14:00 ホテル着
- 15:00 CONC' RN...女子寮訪問・交流
- 16:45 CONC' RN...男子寮訪問・交流
- 20:00 夕食

9月3日(水)

- 07:30 朝食 ミーティング
- 08:30 CONC' RN 女子シェルター訪問
- 09:00 CONC' RN 男子シェルター訪問
- 10:00 CONC' RN ドロップインセンター訪問
レクリエーション・ニュージャルパイグリ駅見学
- 14:50 昼食(ドロップインセンターで子どもたちと一緒に)
- 15:30 女子シェルター訪問
CONC' RN スタッフとディスカッション
- 18:00 男子シェルターへ
女子シェルターの子も来て私たちのために歓迎会
- 21:00 夕食 ミーティング

9月4日(木)

- 08:00 朝食
- 09:00 女子シェルターへ

11 : 00 CONC' RN 児童労働センター訪問・交流〈車〉
15 : 00 昼食
16 : 30 街で買い物（寄付金でロッカーを購入）〈車〉
18 : 00 ニュージャルパイグリ駅
23 : 00 ニュージャルパイグリ駅発〈寝台列車〉
01 : 00 クジビハール着
02 : 00 夕食

9月5日（金）

08 : 00 朝食
09 : 00 クジビハールの CONC' RN ドロップインセンターへ〈車〉
09 : 30 到着 子どもたちと交流
11 : 30 バナラットのジュートファクトリーへ〈車〉
14 : 00 到着 ジュートファクトリー見学
14 : 45 昼食
15 : 15 カリンボンへ〈タクシー〉
19 : 45 宿泊施設着
20 : 30 夕食 ミーティング

9月6日（土）

07 : 45 朝食
08 : 30 グリーンハウス・JICA プロジェクト見学
10 : 30 ワークショップ・ベーカリー見学
11 : 30 昼食
12 : 30 パヨン村へ〈タクシー・徒歩〉
13 : 30 到着 村の女性と交流
15 : 30 カリンボンの街へ〈車〉
17 : 15 街散策
19 : 00 移動〈車〉
20 : 00 夕食 ミーティング

9月7日（日）

08 : 15 朝食
09 : 45 学校・幼稚園見学、料理、散策
12 : 30 昼食
14 : 30 ガールズコテージ訪問・交流
15 : 45 男子学生と交流
16 : 30 移動〈徒歩〉
17 : 30 ブータンの人々を訪問

18 : 00 移動 〈徒歩〉
20 : 00 夕食 ミーティング

9月8日(月)

07 : 30 朝食
08 : 45 バグドグラ空港へ 〈タクシー〉
13 : 05 バグドグラ空港発
14 : 35 コルカタ空港着
15 : 45 ホテル着 〈タクシー〉
18 : 00 マザー・テレサの家へ 〈タクシー〉
20 : 00 夕食 ミーティング

9月9日(火)

06 : 00 朝食
06 : 40 マザー・テレサの家へ 〈タクシー〉
07 : 30 移動 〈タクシー〉
08 : 00 カリガート・シュシュババン見学
12 : 30 昼食
14 : 00 観光
20 : 30 夕食 ミーティング

9月10日(水)

07 : 00 朝食
09 : 00 コルカタ日本領事館へ 〈タクシー〉
10 : 00 コルカタ日本領事館訪問
13 : 00 移動 〈タクシー〉
14 : 00 昼食
17 : 00 マザー・テレサの家へ (ボランティア登録)
20 : 00 夕食 ミーティング

9月11日(木)

08 : 00 朝食
09 : 30 移動 〈タクシー〉
10 : 00 買い物
15 : 00 JICA 講義 (～18 : 00)
20 : 00 夕食 ミーティング

9月12日(金)

06 : 00 朝食
06 : 30 移動 〈タクシー〉
07 : 00 マザー・テレサの家

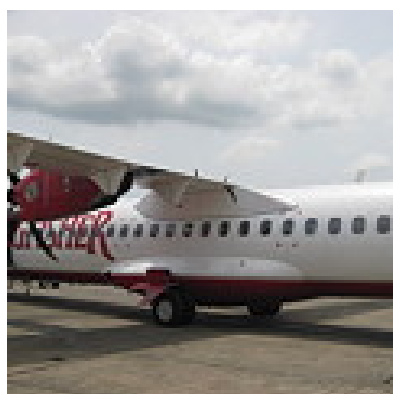
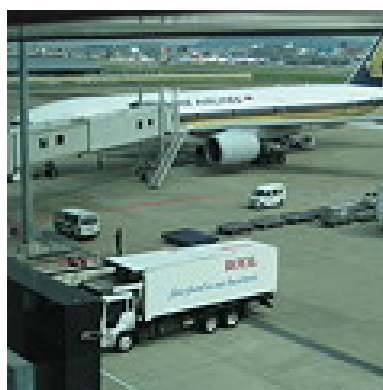
07 : 45 移動 〈バス〉
08 : 00 ボランティア
13 : 00 移動 〈タクシー〉
13 : 30 ホテルで休憩
15 : 00 移動 〈タクシー〉
15 : 30 買い物
17 : 30 夕食
18 : 30 移動 〈タクシー〉
21 : 00 ホテル出発 コルカタ空港へ
23 : 50 コルカタ空港発

9月13日(土)

06 : 30 チャンギ国際空港着
空港内で過ごす (2時間弱のシンガポール無料市内ツアーに参加)

9月14日(日)

01 : 00 チャンギ国際空港発
08 : 05 福岡空港着



CONC'RN(Care Of Needy Children Rightfully Nurtured)

◆CONC'RNとは

2003年に、西ベンガル州のニュージャルパイグリ (New Jalpaigri) で活動を開始。孤児や、家庭の問題（父親の暴力、アルコール中毒、貧困による親の育児放棄…駅に捨てる、迷子など）で家を離れて生活している子どもたちを支援している NGO 団体。危険に瀕している全ての子どもたちが安全な環境で生活でき、教育、健康プログラム、技術向上・訓練、レクリエーション、文化活動をする権利を平等に持つことができる社会作りを目指している。今回私たちは、以下に挙げた施設の内、ニュージャルパイグリにあるドロップインセンターと男女別のシェルター、クジビハールにあるドロップインセンター、ニュージャルパイグリ駅近くのフルバリにある児童労働センターを四日にかけて訪問し、子どもたちと交流したり、スタッフの方々に活動についての話を伺った。

◆子どもたちについて

全体の 80%が男子、20%が女子。支援を受けている子どもたちは 3 才から 18 才。子どもたちは主に、ビハール州（インド北東部）、アッサム（インド北東部）、ベンガル州、ネパールから来ており、中にはムンバイ（インド西部の都市）、グジラート（パキスタン）、バングラデシュから来ている子どもたちもいる。

◎女の子が少ない理由

インドの文化的、社会的な面から見て、女性は家の中で家事やその手伝いをしたりして生活するため、外に出ていくという観念がない。それでも出て行くという女の子は、親の暴力やアルコール中毒などの家庭の問題が原因。他にもスラムの女の子達は性的摂取の目的で街などに売られていくために、スラムには 12 歳以上の女の子はいないなどの理由もある。

◆施設・支援内容

ドロップインセンター (Drop In Center)

ストリートチルドレンや、駅のプラットホーム、スラム街で生活している子どもたちのための、施設。現在 40 人の子どもたちが支援を受けている。子どもたちはこの施設でご飯を食べたり（3食）、保健、ノンフォーマル教育、レクリエーション活動を行っている。

子どもの選定には年齢が一つの大きなポイントとなる。まだ小さな子ども（4～5才）にはノンフォーマル教育を受けさせ、その後正規の学校に通わせる。12才くらいの年齢のこどもの場合は、たいていは職業訓練を受けさせるが（自立支援）、教育を受けるか職業訓練を受けるかは子どもの意思による。

スラムの子どもたちは呼びかけに応じやすいが、自分で生きていくための収入の手段がある子どもたちは呼びかけに応じにくい（私たちが訪問したとき、石を上手に鳴り合わせながら歌を歌ってくれた男の子がいた。彼はその特技を生かしてお金を得ているそう）。子ど

もたちは束縛を嫌い、夜は駅などそれぞれの場所に戻って寝る。

☆この施設は子どもたちが誰でも気軽に立ち寄れる休憩所のような役割を果たしていた。

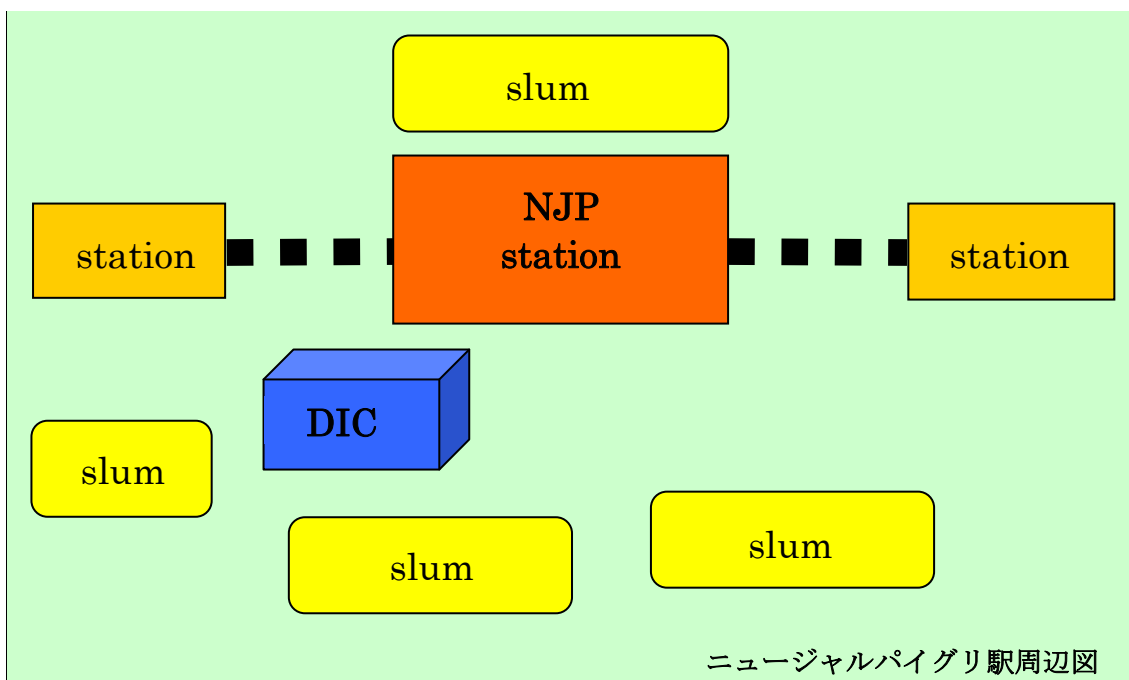
そのため、子どもたちは基本的にはご飯のとき以外は自分の好きな場所で好きなように過ごしていた。駅へ行くと、DIC に通う子どもたちがほうきを見せてくれて、これで駅の掃除をしていると得意そうに教えてくれた。

◎プラットホームの環境（ニュージャルパイグリ駅）

インドのほぼ全ての主要な駅につながっている大きな分岐駅。駅の周りには 4 つの大きなスラム街がある（次ページ図参照）。一つのスラムの人口は約 4000～5000 人。

子どもたちはこの駅で電車の掃除や物乞い、もの集めや水の入ったボトルを売ったり、タンカーからディーゼル油を盗んだりしながら生活している。駅ではドラッグや暴力、性的搾取が頻発しており、環境はとても悪い。

☆夜の NJP 駅は電気はあっても薄暗く、停電もよくあった。プラットホームや階段の下、汽車の待合室の前など至る所で人が寝ていて、子どもと大人が寄り添って寝ている光景も見られた。主要な駅のため、夜遅い時間でも汽車が頻繁に出入りし、プラットホームはたくさんの人で混雑していた。



シェルター (Shelters)

Boy's shelter と Girl's shelter があり、現在 35 人の子どもたちが支援を受けている。ストリートチルドレンや、プラットホームで生活している子どもたち（16 才まで）が夜、安全に寝ることができる場所を提供している。帰るべき場所がなく、保護が必要な子どもたちにとって、生活の拠点は完全にここになる。毎朝瞑想が行われ、子どもたちは比較的落ち着いている。まだ歴史が浅いため、ノンフォーマル教育からフォーマル教育までを受け卒業

業した子どもは20人ほど。また、自分でお金を稼いで生活するすべを見つけて自立する子どももいる。＝社会復帰→小さな自分の店を開いた、結婚した、などの卒業生もいるそう
◎なぜ瞑想をするのか？

駅やストリートで生活していた子どもたちは、一つのことに集中したり気持ちを一定に保っておくことができない。そのため、気持ちを落ち着かせて集中力をつけたり、過去を顧みたりするために毎朝瞑想が行われている。瞑想はあぐらをかいて座り、目を閉じて行われる。実際に私たちも子どもたちと一緒に朝の瞑想に参加したが、瞑想は毎朝、何十分もかけて行われるため、まだ小さな子どもはなかなか集中力が続かず、隣の子とひそひそ話をしたり、ちょっかいを出したりしている子もいた。年齢の大きな子どもになってくると呼吸法も上手にできるようで、小さな子どもに比べるととても落ち着いて生活できているようだった。



瞑想 (男子シェルターにて)



昼ごはん (ドロップインセンターにて)



スタッフから順にご飯を受け取る



ニュージャルパイグリ駅

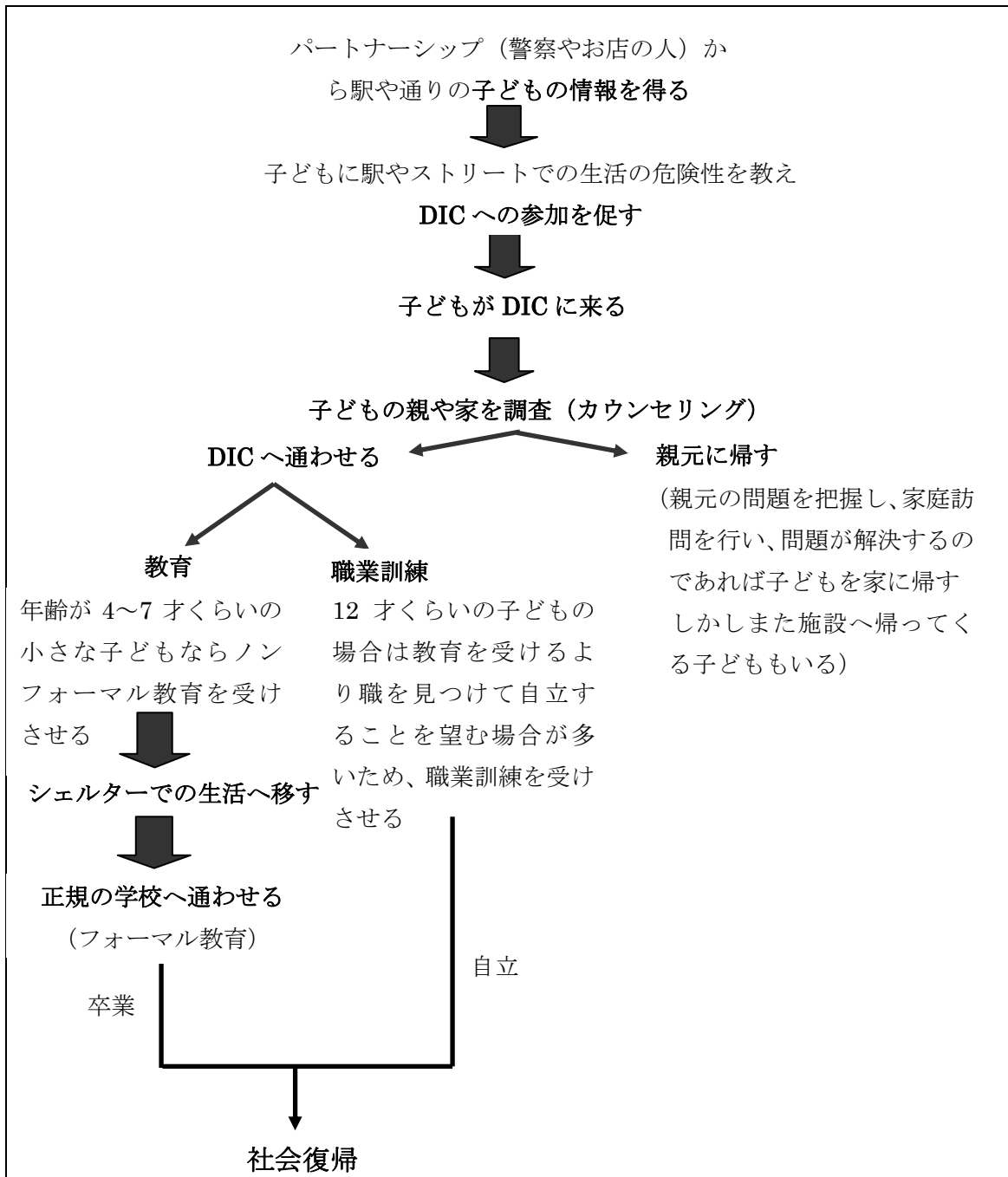


ニュージャルパイグリ駅



駅でモノ拾いをしている子ども

～子どもを保護してからの大まかな流れ～



児童労働センター（Child Labor's Center）

児童労働で働く子どもたち（3～15才くらい）にジュートクラフトや編み物などの技術を教えるための施設。

◆子どもたちとのレクリエーション

DIC とシェルター、児童労働センターでレクリエーションを行い、英語の歌や日本の遊び

を紹介し、子どもたちと交流した。私たちが訪問するたびに、子どもたちが毎唱歌や踊りを披露してくれた。子どもたちはいろいろな地域から来ているため、それぞれの母語で歌を歌ったり、自分で考えた詩を朗読したり、体を思いっきり動かして楽しそうに踊りを踊ってくれたりした。恥ずかしがらず、堂々と披露してくれる姿はとても印象的で、そのレパトリーの多さには本当に驚いた。スタッフの方の話によると、子どもたちは駅やストリートで生活していたころは社会的に搾取を受けていて祭りなどの行事とは無縁だったため、歌や踊りなどを知る機会やそれをするこもなかった。そのため、今このようにして歌や踊りができることをとても喜んでいという。本当に心から楽しんで、そして誇りをもって伝統文化に接している彼らの輝いた姿は、今の私たち日本人にはなかなか見られない光景だった。

ハーフウェイハウス (Half Way House)

精神的に障害がある子どもや、社会的搾取を受けた子どもたちが、カウンセリングや教育を通して成長していくのを支援する施設。

シックベイ (Sick Bay)

街の医療機関を利用するのが困難な障害をもった子どもたちに、様々な病気に対応したケアや精神的支援を行っている。

※一人の子どもにかかる一年間の費用は約 52,300 ルピー (約 157,000 円)

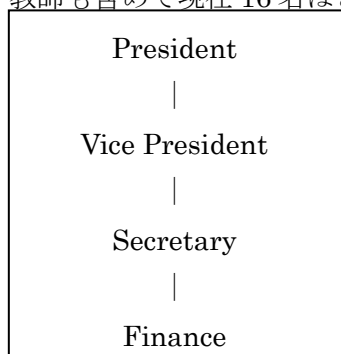
スポンサーを募集している

<保護した子どもの例>

- ・女の子(6才)…親に捨てられ、駅に一人でいたところを保護される。シェルターで生活を始め、現在は正規の学校に通っている。
- ・男の子(7才)…4才のときに、プラットホームをうろついているところを保護される。毎日駅の掃除をしていたため、発見当事、彼の視力はほこりやゴミで弱まっていた。夢は警察官になること。

◆スタッフ・仕事

教師も含めて現在 16 名ほど。組織の中心となって動くスタッフ (左図)



→この下に位置するスタッフ (次ページ参照) は雇われて働く人たち。図 1 の左図のスタッフは大学を卒業して学歴も高く、活動開始時は彼らが組織を動かしていた。子どもたちの教育は地域の学校から生が来て行う場合もある。

スタッフは子どもたちの家庭環境や生活状況を細かく調べ、ひとりひとりの情報をファイリングする。また、子どもたちの親を探し、家を訪問したりして話を聞き、状況に応じて子どもを家に帰したり保護したりする。プラットホームで親のいない子どもたちを見つけ、声をかけるパートナーシップ（お店の人や駅の係員など。NGOによるものではない）に助けられて子どもの存在を知り、ドロップインセンターに誘う役割を担うスタッフ（毎日駅へ足を運ぶ）がいる。保護した子どもの中には自分の名前がわからない子もいるため、スタッフが新たに名前をつけたりもする。

◆過去3年間の実績

- ・ ニュージャラルパイグリ駅のプラットホームで生活する 800 人の子どもたちに、食料、栄養、衣服、健康支援を供給。
- ・ 300 人以上の子どもたちがノンフォーマル教育センターに入り、約 30 人の子どもたちが正規の学校に入学。
- ・ ドロップインセンターの食料、保健、教育、レクリエーションなどを通し、800 人以上の子どもたちに施設を提供。
- ・ ショートステイホーム（Short Stay Home）の子どもたちも職業訓練を受け、約 30 人の子どもたちが正規の学校に入学。
- ・ 200 人近くの子どもたちを親元に帰す。
- ・ フェスティバルの開催、外出、ピクニック
- ・ 同じ考えをもつ団体とのネットワークを築き、問題解決のためのディスカッションを行う。

7月8日と9日の二日間、宮崎公立大学で CONC'RN の子どもたちに寄付する募金活動を行い、20,500 円の募金が集まりました。CONC'RN のスタッフの方々と話し合った結果、ロッカーと衣服と文房具を購入することになり、ロッカーを購入する際は私たちも同行しました。



家具店を見て回っているところ



購入したロッカー

Dr. Graham's Homes

ドクター・グラハムズ・ホームズ学校は、日本を含む世界 8 カ国のNGOによって運営され、貧困のため学校にいけない子ども達を養育・教育しています。

1. 歴史的背景

ドクター・グラハムズ・ホームズは、北東インド、西ベンガル州のヒマラヤ山脈のふもとに位置するカリンボンにある。1889年、スコットランド教会の宣教師である Rev John Anderson Graham (アンダーソン・グラハム氏) が、カリンボンに派遣された。そのとき彼が当地で見たものは、イギリス人やヨーロッパの父親とインド人の母親から、望まれずに生まれた子供達が、茶畑で小作として働かされている悲惨な現状であった。1900年、グラハム氏がそうした恵まれないアングロ・インディアンの子供達を援助しようと設立した寄宿学校が、現在の Dr.Grahams Homes である。

その後も、茶畑で働く子供は、軍隊・鉄道建設その他の産業の作業員の増加に伴い増えていき、必然的に世話を受ける子供達も増えていった。グラハム氏は、キリスト教の隣人愛の精神に基づき、子供達が健康で教育を受けることができ、結果として自立できるような環境を提供していくことを目指した。彼等はこの地で愛されるべき存在となり、グラハム氏のこの地の人々への深い愛情、この地の発展のために献身的に尽くした並外れた努力から、彼は「カリンボンの父」と言われるまでになった。また彼は、彼が1900年にはじめて子供達のために施設をつくったことから、「子供達の父」としても知られるところとなった。

2. 理念

- ① 1900年以来、インドの子供達への福祉向上と教育の機会を提供している。
- ② インドのほか、ネパール、ブータンからも貧しい子供を引き取っている。
- ③ この施設は階級や宗教、肌の色に関係なくだれもが利用できる。
- ④ 恵まれない背景から引き取られてきた約600名の寄宿学生(全寄宿舎生約800名)がおり、生計が建てられるよう援助をしつつ学校での教育を提供している。
- ⑤ 広くボランティアからの寄付金、ハウスペアレンツ、在住者、遺産収入等の支援により運営している。
- ⑥ キリスト教の教えに基づき設立され、教会はだれでも礼拝できる。

ホームズは基本的に貧しいアングロ・インディアンの子供達へ手を差しのべてきており、そのほとんどがカルカッタのスラム街から引き取られてきたが、現在はその他のインド社

会、ブータン・ネパールの近隣諸国・シッキム州やチベットの子供達へも手を差しのべられている。(何人かは北部の難民キャンプから引き取られている。)毎年、専属のソーシャルワーカーに選ばれた30～40人の子供達がグラハムズ・ホームズに引き取られるが、それら子供達の多くはアングロ・インディアンのもまれで、両親がいる子供もいれば片親だけの子供、親のいない子供など様々であり、そのいずれもがとても貧しい環境に育ち、親にも望まれず、愛されることもなく将来に希望をもてない子供達がほとんどである。引き取られる子供には、生まれて数週間の子供もいれば、通学するくらいの年齢の子供もいるが、そのほとんどが教育を終了する10代後半の年齢になるまでホームズに滞在する。

3. 組織 (施設)

①生徒 (子供達)

グラハムズ・ホームズ学校では、通学に係る費用を支払うことの出来るカリンポン周辺の一般家庭の子供達も受け入れており、全体で1,200人の生徒が学んでいることとなる。一般家庭の子供達には、主にヒマラヤ地方のビジネスマンや政府の官僚のように裕福な家庭の子供達も含まれている。ホームズの教育方針で、一般家庭の子供達との生活体験を通して、彼等が将来コンプレックスを持つことがないように配慮したものであったが、学校の独自性を守っていくため、またグラハム氏の意味である「非特権階級」の子供達の成長に貢献していかなければならないという考えから、今後、全生徒数に占める支援を受ける子供の割合を高めていく予定である。全生徒数1,500名のうち、800名が寄宿舎生。うち750名が資金援助を受けていることになる。

②学校 (その他の施設)

学校のある場所は、気候も穏やかで、夏は15～25度、冬は7～15度前後と、子供達を育てるには最も望ましい環境である。寄宿舎(コテージ)のある敷地を含め、全敷地面積は500エーカー(612町歩)に及び、すべてインド政府からの永久借り受けになっている。

施設整備状況

学校校舎のほか、教会、子供診療所(クリニック)、800人の寄宿生徒の食料を賄うための製パン工場や農場までもが整備されている。

学校校舎(保育園、小学校、中学校、高等学校)、中央食堂

子供診療所(クリニック)(医師1名、看護婦2名)、看護学校

農場、畜舎、製パン工場、裁縫工場 他

独立独行であることがドクター・グラハムズ・ホームズの変わらぬ特徴的な特色であり、農場などは野菜・ミルク・チーズ・卵・肉が生産出来るほどに整備され、さらに多くの人

数分に対応しうよう充実してきている。その土地で働くネパール人のためにも、住居提供や医療援助が施されている。身体を健康を維持することは重要と考え、多くの子供達は、入所した際あるいは栄養失調からくる病気にかかった際には、ホームズの病院（クリニック）で治療を受けることとなっている。

その他、コルカタの中心部には、寄付による4階建てのビル（ホステル事務局本部）が確保されており、カースト制度による強い差別のため、職を得られず再びスラムや路上生活者となった学校の卒業生ほか常時50名ほどが住んでいる。

スタッフ構成

・組織

本部事務局・・・会長（理事長）、理事（10名）（すべてインド人）

会長（理事長）・・・ Mr. M.J.Robertson（ロバートソン）（コルカタ滞在）

各国運営委員会・・・①イギリス、②アイルランド、③カナダ、④オーストラリア（2団体）、⑥ニュージーランド、⑦インド、⑧日本：「宮崎国際ボランティアセンター」（代表：杉本）

・学校運営

校長・・・ただ今不在のため教頭が兼任。⇒学校の人事・財産・施設管理運営担当

会計・出納長・・・ Mr.D.Foning⇒学校の財政・経理関係担当

教頭・・・ Mr.R.Monteiro⇒日本での校長の位置づけ。教育カリキュラム面担当

学校教職員数・・・約60名

学校及びコテージアシスタント、生産部門職員数・・・約400名

コテージ・ペアレンツや教師、医者、看護婦、理事などのスタッフは広くインドから召集され、若干はイギリスから召集されている。

教育システム

グラハムズ・ホームズは設立以来、長年の月日の間に数千人の極めて恵まれない子供達を引き取り、自立した大人になるための準備段階としてハイレベルな教育を提供している。生徒達は幼児から22才の年齢までおり、15才にはICSEという、18才にはISCというインド共通の（高等部・大学）入学試験を受けている。子供達の受ける教育水準は極めて高く、多くの子供達は大学へ進学するほか、商売、技術研修、育児・病院看護の道へ進んでいる。子供達の区別は決してなされず、それどころか、それぞれの子供達の融合から、様々な背景・信条・文化の違いを越えての理解・評価を高めることが出来る、との進歩的な考え方が教育の中に取り入れられている。

学年：14学年 【幼稚園（5～6歳）+12学年（小6・中3・高3）】

クラス：34クラス（幼稚園～高校）

カリキュラム構成

- ・ 日本の通常の初等・中等教育のカリキュラムとはほぼ同様の内容になっている。
- ・ ただし、国語は、小学部1年生から英語が必須で、第二外国語が母語、第三外国は仏語・独語等とともに日本語も選択可能となっている。
- ・ 高等部には、技術・家庭科目とともに、職業教育の一環として、2001年2月から園芸科目（花卉栽培）も選択可能な科目としてカリキュラムに加えられた。

※ 上記「園芸科目」は、平成10年度宮崎県研修員シャム・ジョーダン氏が宮崎県（総合農業試験場）の研修の成果をもとに指導していくもの。

- ・ 良好な診療環境、決まった食事の他、学校では、ドラマや音楽、ディベートや芸術、水泳やフットボールその他いろんなスポーツ活動など、独特のカリキュラムが取り入れられている。

※ 本来、インドでは、このような教育は特権階級のみに行われている。

- ・ 生徒達は多くのカリキュラム以外の活動にも積極的に参加し、また毎日のニュース要約広報を通して最新事情の把握が出来る環境が整っている。

③生活棟（コテージ）

最初のホームズのコテージはカリンポンから1マイル離れた標高約1,400mの急斜面の木立の中に建てられたが、子供達の増加に伴い、その後もコテージが建てられていった。現在では、18（～20）のコテージが整備されている。1棟あたり約40名の子供達が寄宿可能であり、4～18才までの子供達が年齢を縦割りにして振り分けられ、それぞれのコテージ毎に、ハウスペアレンツや寮母の世話のもと、一つの大きな「家族（家庭）」として共同で生活している。コテージでは、年長の子供が年少の子供の世話をしていく過程の中で、家庭で生活することの楽しみ・苦勞を体験するだけでなく、家庭の中での役割分担を自覚し、助け合いながら自分達自身でやっていくことの重要性を学ぶのである。また、コテージの環境は、子供達に「家庭」の温かさを感じさせるだけでなく、自立して自分の家庭を築いていく上での働くことの重要性を教えてくれるのである。

4. スポンサーシップ（資金提供）

コルカタやその他西ベンガル州の地域からの、恵まれない衣食にも事欠く主にアングロ・インディアンの子供達に財政的支援を行い、健康的で幸せな環境のもとでのいい教育の機会を提供する支援の枠組みのことである。現在約500名の生徒が海外からのスポンサーによって資金援助を受けている。イギリス・スイス・カナダ・スウェーデン・オーストラリア・ニュージーランド・インドそして日本など8か国のコミッティがグラハム氏の意味を次の世紀まで引き継ぐため、ホームズへの財政的支援に努力している。

※ 日本コミッティ（宮崎国際ボランティアセンター）は年間15名分の資金援助をしている。

平成13年より、生徒1人への教育・衣服・寄宿に係る年間の費用は、約12万4千円であり、その1人に係る費用すべてを負担するスポンサーとなることも出来るし、その一部を負担するスポンサーにもなり得る。寄付金は1年単位で支払うことも出来るし、4半期毎、毎月毎でも問題ない。

5. 独立行政法人 国際協力機構（JICA）業務委託

「草の根技術協力事業 インド グリーンハウス・コミュニティーサービス」

ドクター・グラハムズ・ホームズがあるカリンポン地域で「草の根技術協力事業（農業支援）インド グリーンハウス・コミュニティーサービス」が行われている。この事業は、独立行政法人—国際協力機構（JICA）の業務委託を受け行われている。

・プロジェクトを行うことになった経緯

2003年まで支援してきたドクター・グラハムズ・ホームズの園芸科の技術は、インドの国内外で高く評価されるようになった。そのため学校周辺のたくさんの農家から、「自分達にも農業指導をして欲しい」との強い要望があった。現地の人たちとミーティングを重ね、調査を行い、この「草の根技術協力事業 インド グリーンハウス・コミュニティーサービス」を行うこととなった。

・プロジェクトの概要

カリンポン地域の5つの村に農業支援を3年間かけて行う。農業技術指導員を5名3年間に分けて派遣し、現地に合う野菜・花の開発や、栽培方法の改良、収穫した作物の集出荷・加工技術の指導、さらに、新しい市場の開拓を行う。また、栽培技術の研究、実証、研修、集出荷、加工作業などができるよう、園芸技術センターを建設する。

3年後の目標として、

- ① 対象農家の収入が50%向上する。
- ② 地域特産物が開発される。
- ③ 生産者グループを作り、自立した生産体制を確立する。

が上げられ、地域の経済の活性化を目指す。

・対象地域の問題点

カリンポン地域はヒマラヤの山間部に位置し、80%が専業農家である。米作を中心として、生姜や豆類などが生産されている。しかし、今インドの農家の貧困問題は経済のグローバル化の波におされ、これまでにないほど深刻化している。インドの都市部では、コンピューター産業を中心に経済が活性化され、多くの富を得る層が出てきた。しかし一方で急激なインフレや、読み書きができない、正規の市場で農作物が取引できな

いなどの理由で貧富の差が広がっているのである。このカリンポン地域でも、農作物は地元業者との庭先取引で、とても低い値段で買われ、自分達の食べる物はほとんど残らず、多くの人が慢性的な栄養不良である。貧困のため多くの子ども達は学校に行けず、家の仕事を手伝わなければならない。農業以外の産業はほとんどなく、他に収入を得る手立てもない。このような背景から、草の根の立場から貧困に苦しむ農家に技術支援をし、生産量・収入を増やす、この事業を行うこととなった。

・プロジェクトにより期待される効果

DGH で支援している子ども達は、貧困のために学校に行くチャンスを得られずにいた子ども達であり、教育の機会を与えることは貧困の悪循環を断ち切るために必要不可欠である。同時に、子ども達が育つ地域の経済が発展することも、健全な環境を作り子ども達の将来を安定させる上でとても重要だといえる。この事業により農家の収入を増やすことが出来、子ども達が支援を受けなくとも、学校へ行くことができるようになることを目指す。また、野菜類の生産が増加し、十分な食糧が確保できることで、慢性的な栄養不良の改善が期待される。さらに、花や農産物を加工するにあたり女性の働く場を作ることが出来、これにより、女性の経済的自立を助けることができるようになる。

以下からは私たちが現地で見えてきたプロジェクトの現在状況と問題点について。

3年間の草の根技術協力事業（支援型）は今年の10月に終了するため、現在は1000万円の援助であった支援型の終了後のために5000万円の援助であるパートナー型に、同プロジェクトの継続・改善として申請中である。

・施設について

この事業は上に述べてきたように、DGH の職業訓練の一環としての園芸科の花弁栽培を元に発起したプロジェクトである。そのため学校内の園芸科、グリーンハウスがプロジェクトの中心として位置していて、ここで栽培についてや農作物の加工などが行われており、ブレインの役割を果たしている。

プロジェクトが始まってからグリーンハウスにも支援がなされ、さまざまな施設や品種が持ち込まれた。以下は現在のグリーンハウスにある施設や農作物についてである。

* 13の簡易ビニールハウスと2つのガラスハウスがあり、ここで花や農作物を栽培
現地では元来、農作物の栽培は天候に農作物がさらされる形で栽培されていた。しかし現地では雨季になると大量の雨が降ることに加え、かなり大きなひょうが降ることもある。このような自然環境や天候にさらされることにより、農作物への被害は大きく、それを生計としている村の農民にとっては大きな打撃となる。このような状況に対して、簡易ビニールハウスは大きな助けとなる。雨、ひょう、風などから農作物を守ってくれと同時に、ある程度一定の温度を保つことができる。（日本のもの違って電力は使われ

ず、プラスチックや竹にビニールを被せて作ったもの) また虫の被害を防ぎ、花などは成長に伴って茎を固定していくので、まっすぐで、きれいな形のものができる。簡易ビニールハウスはプラスチックのパイプで作ったものだと1万ルピー(1ルピー=約3円)ほどかかる。現地にある竹を使って作ったものだと、大体4000ルピーくらいで作れる。竹は現地のもので費用はかからず、ビニールの4000ルピーだけが費用としてかかる。竹の場合定期的に交換しなければならないが、それでも5年以上はもつ。

* 栽培の内訳→ ラン・野菜・スターチス・スイートピーなど

日本米は、コシヒカリなど色々な品種を試した上で、ひのひかりが一番適した品種であった。現地の環境に合っていることに加え、味が現地の人々に好まれる。また日本米はインド米よりも、1つの種から多くの芽がなる。1kgの種から約180kgのお米ができるという。日本米は中国人、韓国人、などの外国人に好まれ、売れる。しかし一方で日本米は育てるのがインド米より手間を要し、精米も難しい。専用の機械がないので、米が精米中に割れてしまい、このような割れた米が多いと、売れない。

* オフィス・・・office room とキッチンがある

* スタッフは5人で、臨時の手伝いも何人かいる(皆 DGH 出身)

スタッフは宮崎で農業についての研修を受けた人も何人かおり、仕事も栽培するのを得意とするスタッフや、花のデコレーションを得意とするスタッフもいる。

* JICA プロジェクトにより建てられた施設

グリーンハウス・コミュニティサービスの実施において建設されたこの施設は、とても清潔的で大きい建物である。入ってすぐ左に実験室のような部屋がある。ここは種を取り出したり、発芽させたりするための部屋である。しかしクリーンベンチという機材がないために、まだ使えない状況である。クリーンベンチとは種を発芽させる増殖機のことである。3年の支援が終了するにもかかわらずまだ機材が届かないのは、インド製のクリーンベンチにはアスベストが使用されているという理由がある。アスベストの危険性を認知している以上、インド製のものは使用できない。しかし機材の他国からの持ち込みは、近年輸入により厳しく規制されているため、なかなか機材が得られないでいる状況である。そのため商社からの購入などを考えている。

施設に入って廊下のつきあたりを右に入ると、台所がある。冷蔵庫、コンロ、流しなどがあり、広い。ここにプロジェクトの対象である村の女性たちが集まり、村で栽培された作物を加工する。村で加工しないのは、衛生面の問題を考慮してであり、加工や調理はすべてここで行う。冷蔵庫にはサンプルがぎっしりつまっている。一番現地の人々が気に入っているのが、キムチである。辛いものが好きな現地の人々には、その味が好まれるらしい。その他にも味噌や醤油が作られていた。味噌や醤油は大豆が現地で栽培されているため、その安い大豆を使って加工し、高く売ろうというものである。基本的にこれら加工食品はデリーやコルカタなどの大都市で売られる。日本人や中国人(チャイニーズレストランなど)、などの外国人や富裕層によく売れ、JICA のショップでは売りつ

くしたという。中国産の醤油が現地では安く買えるのだが、中国産のものは化学合成物質が含まれているため、安全でおいしいものを作るという方針の下で商品を作っている。味は日本のものとは違って、醤油は味つき醤油、味噌は塩分が効いていた。

加工品はほとんど都市部の富裕層に売られるのだが、現地で売する場合もある。しかし現地で売する場合、まず味噌や醤油の使い方を知らないという問題がある。どのように使うことでおいしく食べることができるのか教え、知ってもらうことから始めなければならない。そのためスタッフは味噌や醤油を使ったレシピを知りたがっていたので、炊き込みご飯を皆で作って試食し、他にも「すき焼き」や「鮭のちゃんちゃん焼き」などのレシピを紹介した。

台所の隣の部屋は研修室となっていて、その奥の部屋はドライフラワーを作る部屋となっていた。スターチスがたくさん下げてあった。しかし密閉状況にはなく、外気が入ってくる状況であったので、湿気が入ってドライフラワーがかびてしまうおそれがあった。そのため今後きちんとした密閉状況を確保していく必要がある。その隣の部屋は、きのこを栽培する部屋になっていた。

・プロジェクトの課題

（金銭的問題・気候的問題）

上に述べたように現地の農家の人々の農作物の栽培環境はあまりよくなく、農作物は雨や風、ひょうや虫などにさらされている。そのためビニールハウスをもっと普及させたいのだが、金銭的な面を考えると、容易に立てることはできない。

（場所・地理的問題）

カリンポンは山の崖のようなところに民家が建っている。道もとても悪く、雨などで山肌が崩れて道をふさいでいることもしばしばある。このような所では輸送も大変である。道が悪くて、または道がふさがれて車が村の近くまで行けないこともある。遠くの都市に新鮮な花を送るのは難しいので、ドライフラワーにするなどして売る。しかしコストの面から考えると、空港までの車代は安くてすむのに加え、飛行機代はバイヤーが払ってくれるために輸送のためのコストはあまり問題視していなかった。

（マーケティングの問題）

先に述べたように、農作物の加工品などは都市の外国人や富裕層に高く売ることができる。花も同じで、花は装飾品であることから貧しい農民には価値を持たず、売れないため、富裕層をターゲットにコルカタやデリーで売る。これ以外の都市でも売っていきたいが、市場競争が激しくて難しい。とにかく現在のスタッフはマーケティングが苦手なようで、企業とのつきあいや取引がうまくできないようだ。今後はマーケティングのできるスタッフをプロジェクトに取り入れることが大きな課題である。

・プロジェクトの利点

都市の外国人や富裕層をターゲットにしており、関心の高まってきている有機栽培など、安全でおいしいものを提供するという視点であるため、今後もマーケットを拡大していける分野であるということ。貧しい農村の産物を使って、低コストでそれを加工し、富裕層に高く売るという発想。

また現地の農村の人々は、花や地元の農作物以外の栽培の知識はなかったが、このプロジェクトによりただで知識を得ることができる。この知識を活かして生活向上を図っていけるのが何よりの利点。

Paiyong Village の例

グリーンハウス・コミュニティーサービスでは、5つの村で支援を行っている。その村の中のひとつが Paiyong Village (パヨン村) である。私たちは DGH から1番近いこの村を訪問しました。

・村の様子

パヨン村全体では5000人くらいが住んでいる。村はたくさんのセクションに分かれていて、私たちが訪問したセクションの中の人口は200人ほどであった。村人は皆農家であり、それで生計を立てている。村の人々はとても人なつこい。パヨン村に向かうまでの道はとても悪く、途中で車を降りて村まで歩く。村はすごい傾斜面にある。村長さんの家で、彼が主に村やプロジェクトについて話をしてくださった。

・村の教育

村には政府の建てた学校が1つだけある。小学校であり、6・7歳～12・13歳の子ども達に通っている。現在35～40人の子ども達がいる。昔は、学校に行くというのは農家である以上、家の仕事を手伝うために難しかったが、キリスト教の宣教師がカリンボン地域に入ってきて識字教育を普及させていったことから、人々の意識は変わった。カリンボン地域の人々の教育に対する意識は高く、パヨン村の人々も例外ではない。村の子ども達は皆この村の学校に通い、基礎教育を受けている。ここでは読み書きをはじめ、ネパール語や英語、環境学習などを学んでいる。特に英語はとても重要視されていて、村の16歳くらいの女の子達は皆英語が話せた。この学校を卒業した後の進学率も高まっており、卒業後には町にある公立か私立学校で16歳まで勉強する。そして就職するのだが、近年では男の子ばかりでなく女の子も村をでて働く子が増えてきている。しかし就職状況は非常に厳しく、村の学校卒業者の就職率は20%である。就職したとしても労働状況はよくなく、収入も低いため、若者たちは村に戻ってきてしまう。そのため村には若者がたくさんおり、特に男が多い。このグリーンハウス・コミュニティーサービスではこのような若者たちを救う目的も持っている。このプロジェクトを通して若者に高い農業技術を定着させることが期待される。近年は企業による農業の分野への関

心も高いため、このプロジェクトの中で村の若者達に研修を受けさせ、JICA の修了書を渡すことで、村の若者達にそれを武器として就職を助けようという計画もある。

・栽培作物

日本米、スターチス、スイートポテト、白菜などを作っているのだが、ビニールハウスを1つしか見ることができなかった。訪問時はちょうど植えかえの時期で、ハウスの中には何もなかった。

村ではオーガニック作物を栽培している。周りの農家は皆ほとんど化学肥料を使って作っているのだが、カリンボン地域は山間部の傾斜の激しい場所にあるため、化学肥料を使うと、雨でそれらが川に流れ込み、魚が死ぬ。昔と現在では魚の種類は半分ほどになってしまった。そのためプロジェクトでは化学肥料を使わずに栄養ある土を作るためのコンポストの指導をしている。オーガニックはもちろん体によいものだが、現地の人々にはそのような知識はないので、オーガニック商品の小ささ（化学肥料を使った作物はやはり大きい）などから買わない。そのためこのような商品は食に対して意識の高い都市部の富裕層をターゲットに売っていきたいという。現在、野菜は主にシッキムやダーズリンなどの町の市場で売っており、花などはコルカタで売っている。コルカタに、村で作ったオーガニック作物などを富裕層向けに売ってお店を作りたいと現地の人々は考えているようだ。

・村の人々のプロジェクトへの思い

村長さんは、このプロジェクトにはとても感謝していると述べた。新しい技術や、新しい花や野菜を教わり、今まで知らなかったこと、できなかったことができることに感謝しているという。しかし一方、課題はまだたくさんあるとも述べた。

・パヨン村での課題

(気候・自然災害の問題)

ビニールハウスがまだあまり普及されていないため、作物を外で作ることにより作物の成りが天気に左右される。また村への道はとても悪く、雨期になると山肌が崩れて道をふさいでしまう。またここはプレートのつなぎめであり、地震はそうしょっちゅうではないが、おそれは十分にある。このような自然災害で村が壊れてしまう可能性は常にあるため、村長さんは「村の将来は暗い」と語った。

(マーケティングの問題)

作物をつくるコストを考えると、利益はとても少ない。ここ一帯はほとんどの人々が農家であるため、売ることも難しい。そのため加工して売ったり、都市部の富裕層をターゲットに売ったりと、市場を探して確保していく必要がある。

コルカタ総領事館訪問

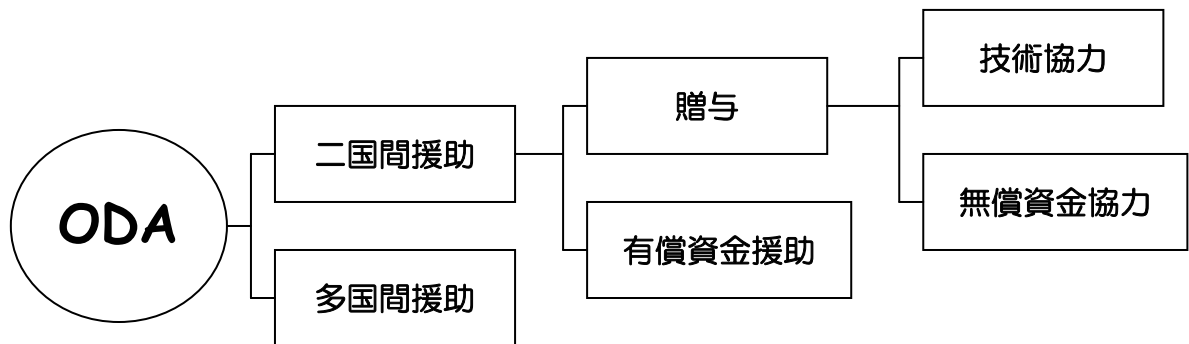
コルカタ総領事館

「草の根・人間の安全保障無償資金協力」外部委嘱員 : 上原若菜さん

上原さんは学生時代からインドでのボランティア経験をお持ちで、フェアトレードを日本で初めて行ったシャプラニールという NGO でのインターンの後、コルカタ総領事館での現職に就かれました。ご自身の、コルカタ総領事館でのお仕事について、またインドでの暮らしについてや女性に関わる問題についてお話していただきました。

1. ODAの資金援助について

日本の ODA は以下の図のように諸外国へ資金援助を行っている。



この図の中の無償資金協力には、一般無償資金協力と、草の根・人間の安全保障無償資金協力がある。前者は主に、基礎生活分野、環境、人材育成等の分野を対象に、返済義務のない贈与という形式の経済協力のこと。後者は基層社会の地域住民の福利向上を目的として実施する、現地における具体的かつ比較的小規模なプロジェクトに対して行う無償資金協力のことである。地域に根ざした組織や、現地の NGO などがこの資金援助の対象団体となる。

2. 草の根・人間の安全保障無償資金協力について

・申請から採用までの流れ

申請

草の根・人間の安全保障無償資金協力の申請は、約200件寄せられる。申請団体はプロジェクト内容やその必要性、また今までの実績などを書いた計画書を提出する。



質疑応答

約200件の計画書の中から、採用できる可能性のある団体のプロジェクトを選定していく。計画書について、団体やプロジェクトについてなどを2～3ヶ月手紙やメールなどでやりとりする。計画書には不備があることが多いので、ここで申請団体と計画書を改善していく。



訪問

実際に活動団体を訪問してスタッフと面会し、活動を視察する。



インド政府の許可

申請団体への資金援助を行うにあたって、インド政府からの許可をもらう。ここで許可が下りるまで非常に時間がかかり、最低3ヶ月、最高では7ヶ月かかることもある。



日本外務省の許可

日本の外務省からも、資金援助の許可をもらう。



採用

申請から採用まで、全体で1年弱の期間がかかる。約200件の申請から、7件を選ぶ。申請団体の選定はとても大変な作業で、採用したいプロジェクトばかりで困る、というよりは、採用できそうなプロジェクトを探し出すのに困ることのほうが多い。その理由としては、書類や計画書に不備が多いこと、また草の根・人間の安全保障無償資金協力の方針にうまく当てはまっていないことが挙げられる。



資金援助

実際の資金援助はリスクを避けるために2回に分けて行われる。インド政府によるNGOなどの団体への資金援助の送金は一般的に遅れる場合が多い。そのため、このJICAによる草の根・人間の安全保障無償資金協力の資金送金も遅れるのではないかと心配する現地の団体は、2度目の送金が遅れてプロジェクトの途中で資金難に陥ることを心配して一括送金を望んでくる場合もある。

・支援内容

草の根・人間の安全保障無償資金協力は、以下の活動に優先的に資金を援助する。

- ・基本的な保健医療活動
- ・初等教育と成人識字教育
- ・貧困の削減

- ・安全な水と公衆衛生
- ・女性のエンパワーメント
- ・ストリートチルドレンのための支援を含む児童福祉と、児童労働の撤廃
- ・障害者支援
- ・環境保全

草の根・人間の安全保障無償資金協力の支援金の上限は1000万円である。支援の対象はハード面、つまり目に見えるものの獲得にのみ資金援助が可能である。例えば学校や施設の建設だ。インドで学校を建設しようとした場合、700万から800万円くらいで2階建ての学校を建てることができる。一方、ソフト面、職員の給与や事務費、管理費などには支援金を利用することができない。

実際に採用されるプロジェクトがどのようなものかという点、医療や教育関係は採用される場合が多い。一方で、女性支援などは採用されにくい。それは、医療や教育支援のプロジェクトだと、病院を建てるだとか、学校を建てるなどのハード面での需要があるが、女性のエンパワーメントのための活動などの人々の意識に働きかけるような、啓発活動の側面をもったものにはハード面での需要よりは、ソフト面での需要が大きい。また活動の詳細を報告していくのが難しい。そのため、草の根・人間の安全保障無償資金協力の対象にはなりにくいという理由がある。女性の支援にしても、職員に女性を採用するなど、プロジェクトの中に2次的理由として女性の支援をうたったプロジェクトが多い。最近では障害者支援のプロジェクトの申請が増えてきている。

3. 草の根・人間の安全保障無償資金協力の仕事の困難

上原さんのお仕事は、草の根・人間の安全保障無償資金協力において、コルカタ総領事館が管轄する地域の申請団体を、上にあげてきた手順で選定をするものです。以下からは、上原さんが日常の仕事の中で感じていらっしゃる困難についてです。

・言語

申請団体とコンタクトをとる時、英語のできるスタッフがいる場合はいいが、ヒンディー語やベンガル語のスタッフしかいないときには困難が生じる。

・通信機器

申請団体の中にはインターネットが整備されていなかったり、使いこなせない場合がある。そのような場合はタイプライターでうったものを送ってくるなどしてコンタクトをとるのだが、時間がかかり、期限が間に合わずに選定から落ちてしまうことがある。

・交渉人

申請団体の中で、正しい情報を持ち、話がきちんとできる人を探す、あるいは見極め

るのは難しい。例えば高齢の、組織のトップと話をして、現場の状況を把握していない場合、具体的な話ができなかったり、いいことばかりを言われてしまう。また申請団体の中には計画書の作成を業者に頼む場合がある。このような計画書は非常によくできていて読みやすいのだが、実際にコンタクトをとり始めると、スタッフが計画書をよく把握できていないために話がうまくかみ合わないことがある。誰が状況と問題をきちんと把握し、プロジェクトについての質問に的確に答えていけるのか見極めること、そしてそのような人を探すのは意外と難しい。いい交渉人が見つければ、話もうまく進むのでプロジェクトも採用されやすい。



JICA インド事務所スタッフの方による講義

独立行政法人 国際協力機構 インド事務所

NGO-JICA ジャパンデスク コーディネーター : 飯塚裕貴子さん

飯塚さんはNGOや国連など様々な機関で働いた経験をお持ちで、国際協力の分野でご活躍なさっている方でした。ご自身の、JICAでのNGOデスクというお仕事について、経験談を交えてお話ししていただきました。また、国際協力の分野で働くことについて、ご自身の職歴やアドバイスも含めお話を伺いました。

1. JICAについて

・組織構成

本部・国内センター（18カ所）

在外事務所（104カ所）



・理念、方針、実施計画策定

取り組む分野は大きく3つに分けられる

① 貧困対策（農業・医療など）

② 経済インフラ整備（交通・運輸など）

③ 環境対策（都市環境・自然環境など）

“現場主義”（国を守るのではなく現場の“人”を守る）

“人間の安全保障”

“技術支援”

“情報発信”（広報。活動やプロジェクトを日本の人たちにも知ってもらう）

・歩みと最近の動向

（JBICが統合）

2008年10月1日から、国際協力銀行（JBIC）がJICAと統合。新JICAは技術協力業務に加え、これまでJBICが担ってきた海外経済協力業務と、外務省が所管していた無償資金協力業務の一部を継承することに。

(コンサルタント雇用)

事業分野の専門家集団にプロジェクトを外部委託。

(アフリカ援助)

2008年はアフリカの年。今年の5月には横浜で第4回アフリカ開発会議が開催された。(アフリカ開発会議はアフリカ諸国首脳と開発パートナーとの間のハイレベルな政策対話を促進するために1993年に開始。この枠組みは、アジアとアフリカの間の協力を特徴とする。)アフリカに関するイベントが多く開催され、アフリカ支援の一層の強化が目指されている。

2. インド事務所について

・事務所構成

事業班 (海外事業を実際に展開するとともに、研修を開いたり、インド政府とのやりとりなどを行う)

総務班 (青年海外協力隊員の精神面でのサポート・NGOデスクなど)

・役割

インド事業の遂行、JICA本部との連絡調整、インド政府との交渉、インド国内での広報、など

2007年のJICAの予算が1500億であったが、そのうち同年のインドへの予算が10億。この予算は技術協力プロジェクトや草の根技術協力、青年海外協力隊などに使われていくのだが、この予算規模は他国に比べて一番大きい。移動費などがかかることが理由の一つである。

スタッフは日本人スタッフと現地人スタッフがいる。現地人スタッフは大学を卒業しているが、やはり日本人スタッフに比べると給与は低い。インド人と仕事をしていくのは、文化や考え方の違いから、なかなか大変である。また仕事のできる、できないに大きな差があることもある。基本的には採用時に日本人に合うインド人を探すようにしている。スタッフの他に、大学院のインターン生などもいる。

以下からは、飯塚さんの担当である草の根技術協力について、またNGOデスクでの実際のお仕事について。

3. 草の根技術協力事業について

草の根技術協力事業とは、日本のNGOや自治体、大学などがもつ技術や経験を活かして企画した、途上国への協力活動をJICAが支援し、共同で実施する事業である。草の根パートナー型が5000万円の支援、草の根支援型が1000万円の支援で、3年契約である。インドでは2003年から始まり、現在では草の根技術協力事業実施中団体が5件（草の根パートナー型3件/草の根支援型2件）、申請中団体が3件、協議中団体が3件である。この事業による支援を受けるにあたって申請団体は、申請書の内容に加えて過去にどのような事業があり予算はどのくらいであったかなども考慮される。

どのように申請されるかという点、まずその申請団体が自分達の地域のJICA国内センターに申請書を提出する。（宮崎ならJICA九州）その後国内センターがJICA本部に提出、提出内容によってアジア第2部、社会開発部、農村開発部などの専門的に分かれた数箇所の部署で決められ、ようやくインド事務所に送られてくる。

・特徴

①JICAプロジェクトとしての特性

- ・インド政府政策と日本ODA方針の整合性
（インドでの事業なのでインド政府の政策と、また一方で日本ODAの予算での事業なのでODAの方針双方との整合性が求められる）
- ・安定した事業予算確保
- ・PCM手法による評価
（PCM：Project Cycle Management 手法とは、開発援助プロジェクトの計画立案・実施・評価という一連のサイクルを、あるプロジェクト概要表を用いて運営管理する手法。この概要表はプロジェクト計画を構成する目標、活動、投入等を含み、それらの論理的な相関関係を示している）
- ・事業費用の透明化義務
（ODAの予算、つまり税金を使つてのプロジェクトなので、実行団体は事業費用を開示していかなければならない）
- ・NGOスタッフの日本研修機会の提供
- ・NGO職員の技術プロジェクトへの参加、など

問題点

- ・採択までの時間が長い
（書類が必要機関にまわり、許可をもらうことなどに時間がかかり、1～2年を要する）
- ・報告書作成の負担
（前述の事業費用の透明化義務などから、NGOはプロジェクトや運営について報告していかなければならないので、報告書を書く。しかし多忙なNGOにとって報告書の作成は結

構な負担となる)

- ・フィードバックの遅延等

②技術協力プロジェクトとの違い

技術協力プロジェクトは基本的に州政府役人への研修が主であり、この草の根技術協力事業は草の根レベルの連携、NGOへの委託契約、NGOの主体性重視などがその違いとして挙げられる。

③草の根技術協力事業の優位点

上記に加え、地域レベルのニーズへの対応、市民からのプロジェクト提案など。特に技術協力プロジェクトははじめに計画したプロジェクトが、途中で変更することができない。その点草の根技術協力事業ではNGOが運営していくためその現場の状況やニーズの変化を敏感に感じ取り、臨機応変に対応することができる。

- ・草の根技術協力事業の活動紹介

どのような支援内容があるかを挙げると、支援型では今回訪問した宮崎国際ボランティアセンターの西ベンガル州における、「インドグリーンハウス・コミュニティサービス（農業技術移転と花卉及び加工農産品販路確立）」、パートナー型では宮崎大学のウッタールプラデシュ州における「インドウッタールプラデシュ州における地下水砒素汚染の総合的対策」などがある。

- ・最近の傾向

(事業規模拡大、大学による事業、企業CSRなど)

企業CSR（社会貢献室）が近年注目され始め、「何か国際協力の分野に投資したい」と考えている企業からの問い合わせなどが増えてきた。JICAがそれら企業と事業をするということはないが、アドバイスはできる（インド政府の方針に合ったもの）。たいていの企業はNGOやインド政府、ネームバリューのある財団などに寄付をする。他には奨学金を与えるなど。企業のイメージアップを狙ってのもので、人材を出すことはなく資金援助であるがその資金も不安定である。

4. NGOデスクについて

- ・役割

日本NGOの草の根事業のサポート

インドNGOとのパートナーシップ構築

(インドNGOからの基金要請など)

日本からの訪問者対応窓口

(日本人大学生や個人訪問者、弁護士など訪問者のレベルやニーズに合わせて対応者を選ぶ)

インド国内広報窓口、など

(インド国内でもJICAのことを知ってもらうために広報が必要)

・ 日常の仕事

JICA本部/国内センターとの連絡調整、草の根事業の各団体へのサポート、インド政府関係省庁との調整、草の根事業のモニタリング出張、連携ワークショップ開催、インド国内調査委託事業、JICA広報出張、など

JICAの海外事務所での仕事というと実際に現地に赴いて活動するというイメージがあるが、基本はペーパーワークがほとんどであり、メールでの連絡調整を図るなどのデスクワークである。インド政府とのやりとりも多く、その際に感じる問題としては、まず返事が遅い、返事がこないということである。書類を提出して許可を得るのにもとても時間がかかるし、何か対応を求めて連絡しても、その返事にもとても時間がかかる。また政府の内部が見えないため、現在どのような状況にあるのか分かりにくいところもある。

草の根技術協力事業はJICA全体の事業の中での割合も小さく、実際の申請団体の採用も少ない。そのためJICA本部はより事業を採用していこうとして、企画を取ろうとする。しかし在外事務所の人数や予算は少なく、これ以上の事業を抱えるキャパシティはない。事業を増やすということも大事だが、在外事務所の処理能力も考慮していかなければならないので、そのバランスが難しい。

課題については今まで挙げたことに加え、事業の評価にさらに気を配っていきたいということである。3年間の援助が行われている間、その実施団体とは事業内容について定期的に報告を受け、問題点を把握したり指導などを行うが、3年間の支援が終了した後、その事業の評価が必要になってくる。どれほどの効果があって、どのような問題点が残ったのか、その後の事業の継続についてなど、現在よりもより力を入れて行くべきだと感じている。

5. インドにおける開発援助の特徴について

・ 社会的文化的に継続されるカースト制度の弊害

カースト制度はもう廃止されているのだが、人々の意識にはまだカーストの意識が残っている。例えばある村でプロジェクトをするために視察に行った時のこと。その村長はカーストの下身分であり、村民が村長の言うことを聞かず、村長の発言力がなか

った。村長の代わりに皆の中で発言力を持つある人が話を進めていき、村長は彼の前では権限もないものとなっていた。実はその人は村長よりカーストの高い身分であるからだった。このような場合、民主的な意思はこの状況では見えてこない。彼らの背景にどのような関係があるのか、十分に知っておいた上で話をしなければならない。

他に助産婦の例も挙げられた。インドでは“出産”に対してあまりよいイメージがなく、助産婦の仕事は汚らしいものと思われている。そのため助産婦には身分の低い人が就くことになる。子どもの出産について死亡率を低くするためにも助産婦を対象にJICAが講義を開くとする。しかし身分が低い彼らは教育を満足に受けることができていることが多く、識字能力がないために講義をしても理解ができず、意味がない。また逆に助産婦が出産についての知識を地域の人々に伝えようとしても、自分達より身分の低い助産婦の話に耳を傾けるものが少ない、などの問題もある。

- ・急速な経済発展+教育レベルの都市農村の格差

インドでは教育を受けているかいないかでその人の将来が大きく変わってくる。都市部では教育機関が整っている場合が多いが、農村ではそうはいかない。そのため農村での医療活動プロジェクトを行おうとしても、医師や看護師が農村に行きたがらない。農村に駐在するとなると、自分の子どもに十分な教育を受けさせることができないからである。

- ・インド政府の方針

インドで開発援助事業の展開をしていく際、インド国内に外国からの基金が入り込むため、国内にどれほどの資金が入ってきているのか把握しておきたいインド政府は、その資金の使い道やプロジェクトについての情報を求める。そしてそのプロジェクト内容はインド政府の方針と合致していなければ許可が下りない。プロジェクト申請の中でも、環境と教育分野のプロジェクトは許可が下りるのが難しい。これはインド政府が環境と教育に関しては自国の方針や方法があるので、他国からの援助はあまり受け入れたくないという理由がある。そのためインド政府がこだわらない分野への支援が中心となる。



マザー・テレサの家でのボランティア

◆マザー・テレサの家

飢えや貧困に苦しむ人々に手を差し伸べることを自らの務めとしたマザー・テレサ。1979年にノーベル平和賞を受賞し、その救済活動は世界各地に広まることとなった。コルカタにあるマザー・テレサの家は、彼女が暮らし、救済活動の拠点とした施設で、現在、遺体が安置されている場所など一部が一般公開されている。また、ここではマザー・テレサの志を引き継ぎ、ボランティア活動を志願して世界中から集まってくる人たちを受け入れている。ボランティアは年齢、性別、国籍関係なく誰でも参加できる。基本的に希望する施設でボランティアが可能。

◆ボランティアができる施設

カリガート (Kalighat) ※男性は男性患者、女性は女性患者のもとでボランティア死を待つ人の家。貧しく、瀕死の状態、主に結核、肝炎、脳膜炎、マラリア、ハンディーキャップ等の患者が男性約 50 名、女性約 50 名。

プレム・ダン (Prem Dum) ※男性は男性患者、女性は女性患者のもとでボランティアカリガートよりも比較的症状の軽く、主に結核、肝炎、脳膜炎、マラリア、ハンディーキャップ等の患者が男性約 80 名、女性約 50 名。身寄りがいない老人や貧しくて医者にかかれない患者、また、知的障害のために家族に捨てられた人もいる。施設内には貧しい子どもたちの学校も併設されている。

シュシュ・ババン (Shishu Bhavan) ダヤ・ダン (Daya Dan)

※シュシュ・ババンは女性のみ、ダヤ・ダンは男女ともにボランティア可能ほとんどが 10 歳に満たない、親のいない子どもたちの施設。ハンディーキャップ（脳性麻痺、知的障害、身体不自由、結核）を待つ部門と養子縁組を待つ部門に分かれている。子どもの数はシュシュ・ババン、ダヤ・ダンともにそれぞれ約 200 名。

シシュ・バン・ハウラ (Shishu Bhawan Howrah)

ハウラー駅に連なる一大スラムの中心にあつて、常時約 40 人の孤児あるいは貧困家庭で育てていけない子どもを預かっている。スラムの子どもを対象にした無料の小学校も開かれている。

シャンティ・ダン (Shanti Dan) ※女性のためのボランティア

孤児や、貧困家庭で育てていけない子どもの一時預かり所になっている施設と、精神疾患の女児などがいる施設の二つがある。約 200 名。

ナボ・ジボン (Nabo Jibon)

孤児や貧しい人、結核の患者のための施設と、アルコール中毒、麻薬中毒患者のための更生施設がある。施設自体大きく、数十人の成人と数十人の子どもたちが生活している。

- 9月8日（月） ボランティア（8日と9日の二日間の予定）の申請に行くが登録時間が終了していたため登録できず。
- 9日（火） 早朝、当日のボランティアの申請に行くが叶わず。
カリガートとシュシュ・ババンの施設に見学へ。
- 10日（水） 夕方、12日（金）のボランティアの申請に行く（木曜日はボランティア活動が休みのため）。オリエンテーションで施設や活動内容について、注意事項などの説明を受ける。シスターと面談を行い、ボランティアの日数やボランティア先を決定。メンバー全員カリガートでのボランティアを希望していたが、既にボランティアできる枠がなく、ボランティア先はプレム・ダンに決定。
- 12日（金） プレム・ダンで午前中のみ（8:00～12:00）のボランティア。

◆プレム・ダンでのボランティア内容

施設に到着後、荷物を置いてエプロン着用。仕事の内容はシスターやソーシャルワーカー、先輩ボランティアの人に聞いて行った。

- ・洗濯…汚れのひどい衣服とそれほどでもないものに分け、それぞれを別々のたらいに入れて手洗い。汚れのひどい衣服の方には強い洗剤を使うため、ゴム手袋をしての作業。衣服をたらいに入れる前に汚れをホースで洗い流すソーシャルワーカーのおばさんは、マスクと手袋をしていた。
- ・移動補助、話相手
 (休憩)…30分間の休憩の予定だったが、ボランティア者が多く作業が早く終わったため、食事補助が始まるまでの約1時間休憩をとる。施設の外のベンチに座り、チャイトゆで卵、バナナを自由にとって食べることができた。他の国の人や、日本の大学生（団体で来ている人が多かった）と話をして情報を交換し合った。
- ・食事補助…昼食のカレーを入所者のところへ運び、自分で食べることができない人や寝たきりの人にはスプーンを使い食べさせる。その後はデザート。食事をし終えた入所者は、ソーシャルワーカーが持ってくる、たらいに入った水で順番に手を洗う。食器を回収し外の洗い場で洗う。

たった5時間のボランティアだったため、作業の仕方や全体の流れ、そして入所者の特徴もよくつかめないうまま終わってしまった。中には、何ヶ月間もここでボランティアをされている人もいた。

宮崎公立大学の学生や職員の方々に折ってもらった千羽鶴をマザー・テレサの家へ持っていき、マザー・テレサの遺体が安置されている棺の上に飾っていただいた。シスターから、鶴を折ってくれた学生にと、マザー・テレサの顔が印刷され、彼女が着ていたサリーの布が貼り付けられているカードをいただいた。

ツアーの企画から実行・報告会までの流れ

| | | |
|----|------------|---|
| 4月 | 20日頃 | <ul style="list-style-type: none"> ・スタッアの企画について話し合いを始める。これからの予定（広報、募集や事前研修の日程決め）、ツアー日程、航空会社、費用について話し合う。 ・領事館スタッフの方と訪問先の NGO や現地の治安についてメールでやりとりを始める。 |
| 5月 | 8日 9日 | ・宮崎公立大学生に向けてスタッアの広報開始。スタッア説明会の宣伝。 |
| | 14日 | ・宮崎国際ボランティアセンターへ、理事の杉本さんに会いに行く。スタッアについて、日程や訪問先、費用などについてアドバイスをいただく。 |
| | 19日 20日 | ・スタッア説明会。お昼休みを利用し開催。合計30名弱が参加。 |
| | 28日 | ・スタッアメンバー応募締め切り。 |
| 6月 | 2日 | ・航空券予約。安さと旅行会社のアドバイスから航空会社を決定。 |
| | 第一週目 | ・昼休みにスタッアメンバー初顔合わせ。 |
| | 10日 | ・杉本さん公立大訪問。スタッアメンバーとの初面会。現地の情報と、アドバイスをいただく。メンバーでの第一回ミーティング。 |
| | 17日 | ・スタッアメンバーでの定期的なミーティングが始まる。第2回ミーティング。メンバーがスタッアに参加した目的をシェアし、あだ名も決定。日程について、皆が現地でしたいことなどを話し合う。 |
| | 24日 | ・第3回ミーティング。ダーズリン地区でのストライキ問題について現状を確認し、話し合う。DGHに行けなくなった場合の日程第2案を考える。予防接種についての情報提供も。 |
| 7月 | 7月～8月 | ・各自で予防接種を受けに行きだす。 |
| | 1日 | ・第4回ミーティング。現地のストライキ問題により日程の変更案についてと、代わりに訪問先を探すために現地の NGO についての情報提供。公立大での募金活動についての話し合い。 |
| | 7日 | ・スタッアメンバーの交流を深めるための夕食会。 |
| | 8日 | ・第5回ミーティング。訪問先やビザの取得などについて話し合う。 |
| | 8日 9日 | ・公立大の学食前にて CONC'RN への募金活動とマザーハウスへの千羽鶴作成協力を募る。 |
| | 15日 | ・第6回ミーティング。新日程の決定。現地でのストライキについて勉強。夏休み中の勉強会について、各自の調べる内容の担当を決める。 |

| | | |
|-----|------------|--|
| | 22日 | ・第7回ミーティング。費用についてと CONC'RN でのボランティア内容について話し合う。 |
| | 24日 | ・航空代金振込み期日。 |
| | 25日 | ・ビザ代金振込み期日。 |
| | 30日 | ・杉本さんを交え、公立大で勉強会。インドの歴史、文化、宗教、政治、経済から、貧困問題、教育、農業など様々な分野について、各自で調べてきた担当分野を発表する。また CONC'RN でのボランティア内容を決め、グループを作って担当を決める。 |
| 8月 | 11日 | ・第9回ミーティング。前回の勉強会の続きと、CONC'RN でのボランティアの準備。誓約書の記入。 |
| | 25日 | ・第10回ミーティング。ツアーの最終確認としおりの配布。千羽鶴作成。 |
| | 最終週 | ・海外旅行保険をかける。 |
| | 31日 | ・福岡へ出発。 |
| 9月 | 1日～ 12日 | インドスタディーツアー |
| | 13日 | ・シンガポール観光 |
| | 14日 | ・帰国 |
| 10月 | 5日 | ・報告会のミーティング。報告内容と作業分担を決める。各自で自分の担当の資料を作り始める。 |
| | 14日 | ・報告会の資料作成の進み具合の確認。 |
| | 16日 | ・報告会の資料完成。 |
| | 17日 | ・報告会予行練習。 |
| | 20日 | 報告会 |
| | 25日 | 宮崎国際ボランティアセンターとの合同報告会 |

費用

【国内】

| | |
|--------------------------|----------|
| 航空費(国際線) | ¥126,445 |
| 予防接種（日本脳炎 破傷風 A型肝炎 B型肝炎） | ¥20,000 |
| 海外旅行保険 | ¥8,500 |
| ビザ | ¥4,000 |
| パスポート | ¥16,000 |
| ホテル冷泉閣 | ¥4,000 |
| バス（宮崎ー福岡） | ¥6,300 |
| ¥185,245 | |

【インド滞在費（6人分）】

| | |
|--------------------------------|----------|
| 食費 | Rs1,622 |
| 交通費 | Rs62,375 |
| 宿泊費 | Rs26,300 |
| その他 | Rs1,412 |
| Rs91,709・・・1人約 Rs15,285 | |

¥41311

※現地滞在時のレート ¥100=3.7Rs で計算

合計 ¥226,555



【インド滞在費 詳細】

| | | 食費 | 交通費 | 宿泊費 | その他 |
|-------|-----------|-------|--------|--------|-------|
| 9月1日 | 福岡 | | | | |
| | Kolkata | | 1,500 | | |
| 9月2日 | Kolkata | 408 | 2,065 | 1,600 | 960 |
| | NJP | | 24,149 | | |
| 9月3日 | NJP | 406 | 80 | 1,600 | 452 |
| 9月4日 | NJP | 102 | 380 | 1,500 | |
| | Banarahat | | 2,048 | | |
| 9月5日 | Kalimpong | | 3,850 | 2,400 | |
| 9月6日 | Kalimpong | | | 2,400 | |
| 9月7日 | Kalimpong | | | 2,400 | |
| 9月8日 | Kalimpong | | 1,872 | 3,600 | |
| | Kolkata | | 24,149 | | |
| 9月9日 | Kolkata | 233 | 564 | 3,600 | |
| 9月10日 | Kolkata | 180 | 600 | 3,600 | |
| 9月11日 | Kolkata | | 110 | 3,600 | |
| 9月12日 | Kolkata | 293 | 1,008 | | |
| | Singapore | | | | |
| 9月13日 | Singapore | | | | |
| 9月14日 | Singapore | | | | |
| | 福岡 | | | | |
| 合計 | | 1,622 | 62,375 | 26,300 | 1,412 |

合計 $1,622 + 62,375 + 26,300 + 1,412 = 91,709$

一人当たり $91,709 \div 6 = \underline{15,285Rs}$

※食費は各自で支払った場合は記録していないため空白あり。

※「その他」には列車のキャンセル料など。

※お土産などの雑費は含まれず。

インドスタツアを終えて

3年 加賀谷 まどか

このインドスタディーツアーは、私が大学生活を通して色々な活動をしていく中で、自分が持った問題意識に、自分なりに取り組んでみようと思って考え付いたものでした。そんな自分の思い付きが実際に多くの人達を巻き込んでいき、そして協力をかりてこうして無事にやりとげることができたことにとっても驚いて、そして感謝しています。

杉本さんの助けを多くかりながらでしたが、スタディーツアーの企画、日程の調整、現地 NGO とのコンタクトなどを進めていくのは、このような経験がない私にとっては想像以上に大変でした。しかしとてもやりがいがあり、企画がどんどん明確になって実現に近づいていくのは、とてもわくわくするものでした。そして現地では、リーダーとして皆の前に立ってツアーを進めていく責任の重さを改めて感じました。あまりこのような役柄をしたことがないので、うまくできない部分も多くあり、もっとうまくツアーをマネジメントできたら、皆もっと多くのことを学ぶことができたのかなと考えることもありました。たくさん悩みもしましたが、皆がツアーの合間にみせる楽しそうな表情や、正直な感想と意見、それぞれ色々なことを思って考えている姿をみると、皆にとって意義のあるツアーになったのかな、とうれしく思いました。そして何より、スタツアメンバーとインドで過ごした日々は、毎日がとても濃くて、思い悩みながらも楽しくて、忘れられない日々となりました。

現地では、訪問先の NGO のスタッフの方達と接する機会がとても多く、活動内容や、自分達がここで何を知りたくて何をしたいのか、などを毎日話し合っていました。皆さん本当にいい人達で、私のへたくそな英語に一生懸命つきあってくれました。そしてツアーを色々な部分で助けてくれました。訪問先の NGO スタッフだけでなく、現地で会った多くの人達に、たくさん協力と親切をもらいました。こんなにいい出会いのたくさん詰まったツアーになったことを、本当に嬉しく思っています。この出会いはこれからも大切にして、いつか皆さんにまた会いに行きたいと心から思っています。

そして今回のこのツアーで、「1つのことをやり遂げた」という実感を得ることができました。自分の力不足は日々感じて、歯がゆい思いもしましたが、苦手なことからも逃げずに、何とか全力でやりきったという思いは、これからの自分の励みになると思います。そしてもちろんこうしてやり遂げることができたのは、本当に多くの人達の協力があったことだったということも、スタディーツアーを終えてみて、強く感じています。

約半年をかけて取り組んだこの企画でしたが、とても充実していたこの半年は、月日を感じさせないくらいあっという間に過ぎ去っていった気がします。このスタツアで生まれた新しい出会いが、メンバー皆のこれからの生活に、プラスになっていくといいなと思います。

達成感

3年 前住 深雪

高校生の頃に国際協力に関心を持ち始め、海外でのボランティアに参加したいとは思っていたもののなかなかきっかけをつかめないうちに、去年の冬、加賀谷さんからこのスタディーツアー計画の話を持ちかけられました。ただ単に国際協力に関心があったからというだけではなく、大学生の間に何か大きなことをやり遂げ、その達成感や自信を得たかった私は、この誘いにすぐさまオーケーを出しました。9月の出発に向けて今年の4月から二人で本格的に準備を始めたこの活動は、6月からメンバー6人での本格的なスタートとなりました。期待に胸を膨らませて始めた企画でしたが、出発までの間に思った以上にたくさんの壁にぶつかり、頭を悩ませる毎日でした。中でも日程と費用の調整は特に大変で、旅行会社や訪問先と連絡を取り合っていく内に次から次へと変更しなければならない点がたくさん出てきました。自分ひとりで行く旅行とは違い、加賀谷さんとともにメンバーを引っ張っていく立場にあるため、問題が発生する度に早く何とかしなければという焦りと責任を感じるがよくありました。しかしそれらを一つずつ乗り越えていく度に、よかったという安心感とともに自分の自信へとつながっていき、やりがいを感じる毎日でもありました。なかなか時間が確保できず思うように作業が進まないこともあったけれど、メンバー全員で協力して準備を進め、遂にインドでの活動本番を迎えました。

初めて訪れたインドは、とにかく毎日が新しい発見と刺激の連続でした。インドでの生活は一日一日がとても濃く、2日しか経っていないのにもう何週間も滞在しているかのような感覚になったりもしました。同じアジアでも、インドの生活や文化は日本とはかなり違います。インドは貧富の差が激しいということは知識としては知っていたけれど、ただ単に知っているのと、実際にその場に行って自分の目で見るのとでは受ける衝撃はかなり違いました。初めてコルカタの街を歩いたとき、途上国の現状を目の当たりにした私たちは言葉を失いました。路上生活者の数は私の想像を遥かに上回り、物乞いをしている子どもや大人、老人の横をきれいに着飾った富裕層の人々がさっそうと歩いていく光景を見ると、なんともいえない気持ちになりました。私が今までどれほど恵まれた環境の中で生活してきたのかを改めて実感し、日本での自分の生活を考えるきっかけとなりました。今回のツアーで私が特に心に残っているのはインドの人々との出会いです。10日間で本当にたくさんの人に出会い、交流し、本当にお世話になりました。CONC'RNの子どもたちとの出会いは私の宝物です。子どもたちは様々なバックグラウンドを抱えているけれど、笑顔がとってもとっても純粋で、フレンドリーで、私たちにはないような素敵な心を持っていました。途上国に生きる子どもたちは貧しくてかわいそうだと思われるかもしれないけれど、私は彼らの笑顔はどこの先進国にも負けないくらい素敵だと思います。今回の訪問ではそれを強く実感しました。そして、彼らのために自分にできることは何なのかということをも自問する毎日でした。今回のこの報告会で途上国の現状を伝えることも、その一つの

手段だと思えます。

インドへの出発が近づくにつれて安全面への責任の重みをより強く感じるようになっていき、不安になることもありました。メンバー全員無事に帰国できて本当によかったです。本当に充実したツアーになり、有意義な夏休みを過ごすことができました。また、卒業後の自分の進路を考えるよい刺激にもなりました。近い将来、必ずまたインドを訪問したいと思えます。企画をして準備を始めてから実行、報告会に至るまでの半年間、何度も壁にぶつかり大変なことも多かったですけれど、本当にたくさんのことを学ぶことができ、自分自身大きく成長することができました。メンバーのみんなと出会えて、このメンバーでツアーができて、本当によかったです。みんなありがとう！そしてまどかちゃん、ツアーの企画で声をかけてくれてありがとう！みんな、おつかれさまでした。

インドスタディーツアー！！

3年 上村 望弥

私はインドの文化や風土に興味があり、今回のツアーに参加しました。肌で感じたインドの空気、におい、人々の姿はきっと一生忘れないと思えます。

インドで一番印象に残っていることは人の多さです。街中、農村どこに行っても人であふれています。しかもインドは多民族、多宗教の国です。民族や宗教、生活レベルの高い人も低い人もごちゃ混ぜになっているあの雰囲気は忘れられません。物乞いをするひと、道端に駅のホームに寝泊りしている人がたくさんいました。道路には HONDA や TOYOTA のピカピカの車、排気ガスを撒き散らして走る大型トラック、黄色いタクシー、ぼろぼろのリキシャーが走り、クラクションと人の声が鳴り響きます。

日本に帰ってきて、みんな同じようなかっこうをして、同じようなところで買い物をして、同じようなところで食事をしている。もちろん道端に一人の物乞いもいない。という今まで当たり前だと思っていた日本の風景に逆にカルチャーショックを受けてしまいました。インドが独特なのではなくて、日本が特殊なのかもというのが正直な感想です。

また、インドでの 2 週間は自分の勉強不足を痛感する日々でした。インドでのコミュニケーションはずっと英語で行っていました。スタッフの方から説明を受けるのもすべて英語です。聞き取りは耳が慣れれば何とかついていくことができましたが、話すことができ

ません。中学・高校・大学と英語を勉強してきているにもかかわらず、思ったことを英語で表現できないというふがないおもいをしました。英語だけでなく、日本の文化や自分の専攻分野など質問に答えられないことも多く、恥ずかしい思いをしました。

今回 2 週間という短い期間でしたが、とても充実した 1 日 1 日を過ごすことができました。ツアーで厳しい現実を目の当たりにし、しかし今の自分達には解決法もわからなければ、何ができるのかもわからない。という自分達の無力さを感じることもありました。でも今は、私たちが見てきたことを伝え、少しでも多くの人に興味を持ってもらいたい、それが今私たちにできることだと思っています。

スタツアを通して

2 年 本木下 久美子

2 週間という短い期間でしたがインドは私に多くの衝撃を与え、今までにテレビという画面でしか見たことのない世界へ導いてくれました。

今回、宮崎公立大学で夏休みを利用し 3 年生の加賀谷さんと前住さんがインドスタディーツアーを企画してくれました。はじめは本当に興味本意でした。しかし私自身の中で今年の夏休みこそは何かやりたい！という強い気持ちがありました。2 年前期で本校の助教堀口先生の国際協力論を受講しており、少しずつでしたが国際協力に興味を持ちはじめていました。実際インドという国に対し不安はものすごくありました。国の情勢も日本のように安定しているわけではないし、現在もたびたびテロや観光客を狙った犯罪が絶えません。だからインドに行っても最初は本当に不安と恐怖で落ち着かない生活を送っていました。

私がインドという発展途上国で最も衝撃を受けたのが観光客やインドの裕福層に対する物乞いでした。泣き喚く赤ん坊を抱きながら手を差し出してくる母親。がりがりに痩せているが純粋な目をして食べ物を要求してくる子供たち。身体に障害を抱えているため路上に座り込み金銭を要求する人々。途上国と呼ばれるインドを歩けば必ず、物乞いに出会うのが現在の世界の現状です。初めのうちは、物乞いをする人々に対し目を背けることでその場をのりきっていました。しかし、マザーテレサの家で出会った男の子に対してはそうすることができませんでした。彼は私の手を握り、じっと目をみつめて“NO MONEY”

と何度も繰り返しました。マザーの教えで物乞いをする人に対し金銭を与えてはいけない、食べるものや衣服を与えるという決まりがあったようです。彼は必死に私をレストランへ連れて行こうとしました。しかし、他の国の人達と団体行動をとっていたので離れるわけにもいかず、一緒に行く事ができないとジェスチャーで伝えていました。彼は私がレストランへ連れて行って欲しくないと理解すると、顔の表情を一瞬にして変え、跡がつくほど強く握っていた私の手を振りはらい走ってどこか消えていきました。その瞬間、私は自分の無力さに腹がたってきました。この少年に出会う前に CONC'RN や DGH で多くの孤児と触れ合ってきました。そのとき多くの子供たちの笑顔を見てきました。私は施設の子供たちと交流することで勝手に変な自己満足をしていました。だからリアルなストリートチルドレンに出会い、そのときに何もすることができないことが悔しくて仕方ありませんでした。

現在インドには首都のデリーだけでも物乞いをする人が 58,570 人います。そのうち 18,000 人が 18 歳未満の子供たちです。私たちが暖かい部屋のなかで食べ物を余らせてゴミという形にしている時、世界では多くの人が食べるものに困り死に至っています。私はインドにいるとき、日本に戻り日本という贅沢な暮らしに慣れていく自分が恐ろしくてたまりませんでした。実際日本に戻ると、日本という国の恵まれた環境を改めて実感しました。これから私はまた日本で暮らしていきます。しかし世界には恵まれない環境で暮らす人々が数え切れないほど存在すること、自分の暮らす環境はとても恵まれていることを忘れず、より多くの人にこの事実を伝えていきたいと思います。この貴重な経験を生かし、将来的には世界が少しでも良い方向に進む手助けができたらと思いました。

インドを見て

1年 佐藤 香菜

私は今まで外国へ行ったことがなくて夏休みに絶対行こうとしたが、一人で海外はさすがに勇気が出なくどうしようと思っていた時にこのツアーの存在を知って、ただの観光旅行では嫌だなと考えていた私にとってとてもいい経験になるだろうと確信を持って参加を決意した。

初めて見る途上国はメディアの世界とは違って凄まじかった。貧困の状況はあまりにも

自分の生活とかけ離れていて、ある程度は覚悟していたつもりだったがその現実に落胆してしまった。お金をもらうために親切にすることも、赤ん坊を泣かせて信号待ちの車にむかって物乞いをする母親、片腕の半分がない部分を指差し物乞いをする老人、都会の歩道に座って苦しそうな表情をしながら物乞いをする老婆…。それともう一つ驚いたことは、子どもたちや路上生活者たちの目の前でポイ捨てする裕福な人がいたことである。インドの人たちは環境問題についての意識がなく、意識改革する必要があると思った。

法律上禁止されているカースト制が今でも残っていて、指定カーストの人は差別されていてまともな仕事ができない。私が見た飲食店の清掃員はボロボロの服を着ていて、身分の低い人だとぱっと見でわかった。こういう明らかな身分差別もなくしていかなければならないと感じた。

しかし、貧しいにもかかわらず子どもたちは元気に純粋に一生懸命に必死に素直に楽しく生きていて、些細なことでよく悩んでいた自分は甘かったと思い知らされた。蛇口をひねれば水が出てくること、トイレに紙があること、服が何種類もありオシャレができること、食べ物があること、病気がないこと、他にも日本ではごく当たり前なことがこんなにも恵まれているなんて気付けなかった。

このスタツアは様々な大切さが学べて本当に意義のあるものであった。この気持ちを決して忘れずにこれまでの贅沢な生活を必要最低限な生活へと改め、子どもたちの態度を見習って熱心に勉強していこうと思う。そして、貧困は実際起こっている事実であって、同じ人間として無関係ではない見過ごせない問題であることを少しでも多くの人に考えてもらいたいので伝えていきたい。日本にいても助けになることはたくさんあるのでこれから積極的にできることをしていきたい。

刺激だらけの2週間

1年 藤田 夏未

私がこのツアーに参加しようと思った理由は、高校の時から発展途上国を支援するNGOに興味があったからである。

インドに着いて、最初に思ったことは「やっぱり空気が違うな」だった。コルカタで空港を出て、荷物を運ぶとき初めて物乞いを受けた。彼らは、お金をもらうために私た

ちにとても親切にしてきた。こういったことは、それからよくある事であった。私は、親切にされてこんなに悲しくなったことは初めてだった。

CONC'RN では子どもたちと遊んだことがとても楽しかった。親のいない子ども、親がいても暴力などでそこにいざるを得ない子ども、薬物中毒になっていた子どもなど、それぞれが違った事情でそこで暮らしていた。しかし、子どもたちは、私が思っていた以上に明るくて、積極的だった。子どもたちは私たちに非常に懐いてくれて、嬉しかった。私は、CONC'RN で親のありがたみを知った。家庭の事情で親子が離れて暮らすことは、インドに限ったことではない。日本でも、虐待などは実際に起こっていることだ。その中で、私が両親に愛されながら今まで育てられてきたことは、とても感謝すべきことなのだ実感した。

カリンポンでは、色んな人と英語で話す機会が多くあった。私は、何回も聞きなおしたりしながらやっとなで会話をつなげていた。またそこにいる子たちは、勉強にとても熱心だった。私は勉強にそんなに熱心になったことはあまりなかったので、感心したと同時に反省した。勉強ができるということは、嬉しいこと。彼らの勉強に対する意欲に、私は刺激を受けた。

街並みは、日本とは全く違った光景がひろがる。歩道には多くの人たちが住んでいて、私たちが通る横でご飯をたべたりしていた。また、車道には車線のないところがほとんどなので、いつ事故が起こってもおかしくない状況だった。改善すべきところはたくさんあったけれど、今はそこまで手がまわらないことが現状であろう。しかしそれ以前に、インドにはルールというものが定着していないと思った。つまり、彼らは自由人なのだ。タクシーに乗っていて思ったことは、全ての人が自分たちのことしか考えていないということ。クラクションを鳴らしまくることも、1つの例であると思う。

しかし、悪いことだらけではなかった。私たちがタクシーをつかまえられずに困っていたとき、周りにいる人々が私たちのために交渉してくれたりしたときも多々あった。彼らは、人を手助けすることが好きなのかもしれない。まあ、日本と一緒に人によりけりである。

私は、このスタディーツアーで色々なことを学んだ。実際に現地に行って、その国の文化を肌で感じることの大切さ、私たち日本人が幸せすぎるということ。そして、家族の大切さ、人を助けることの喜び。自分のこれからの人生について、とても考えさせられるツアーとなった。この先、この経験は絶対に役立つだろう。

また、このツアーを通して出会った仲間との絆を大切にしていきたいと思う。このツアーがあんなに楽しく、充実していたのも、今まで一緒に過ごしたこともなかったのに、2週間気を使わず、安心して過ごせたのはこの仲間だったからだ。出会うべくして出会った、このツアーの仲間やインドで出会った友達をこれからも大切にしていきたい。

お礼

今回の第一回インドスタディーツアーは、本当に多くの方々に支えていただいたことで、こうしてメンバー全員が無事に日程を終了することができ、多くのことを学んだ実りあるものとなりました。「学生が作り上げるスタディーツアーをしたい!」という思いとともに始まった企画でありましたが、実際この多くの方々のご協力がなければ、このツアーは実現しなかったものであり、このような私達の企画に力をかしていただいたすべての方々にはメンバー一同、大変感謝しております。

宮崎国際ボランティアセンターの理事の杉本さんには、この企画全体をサポートしていただき、たくさんのおアドバイストともに、現地で私達が安全に日程を進められるように細かいところまでアレンジメントをしていただきました。訪問先の NGO、Dr.Graham's Homes や CONC'RN、BIRDS、マザーハウスでは、スタッフの方々がお忙しい中快く私達を迎え入れてくださり、活動について丁寧に紹介していただきました。コルカタ総領事館の方々には、今回訪問したダージリン地方でのストライキについて、情報提供と多くのアドバイスをいただき、訪問時には興味深いお話を聞かせていただきました。またデリーから私達に講義をしに来ていただいた JICA スタッフの方にもとても興味深いお話をいただきました。そして募金に協力して下さった宮崎公立大学の先生方や学生の皆様、そして今回のツアーを承諾して下さった学長にも、心から感謝申し上げます。

上にあげました多くの方々、またその他ご協力いただいた方々には、私達の未熟さゆえにご迷惑をおかけした部分もありましたが、今回のツアーで学んだ多くのことを、メンバーそれぞれ今後の勉学の励みにしていきたいと考えています。

皆様のご協力、本当にありがとうございました。

第一回インドスタディーツアーメンバー
加賀谷まどか 前住深雪 上村望弥
本木下久美子 佐藤香菜 藤田夏未